

突然だが働き先の主従
百合がとても良い。

とほくれす

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あつ、俺ですか？ いやー男が百合に交じるマナー違反は通り魔に刺されても当然のように死体を蹴って捨てられたりされる罪状なのでしません。

そう言える思慮深い男でありたかった。なりたかっただけ。世の中はむずかしかった。

目次

第3話	第2話	第1話
21	9	1

第1話

突然だが、働き先の主従百合がとても良い。

ああ待て。待ち給えよ諸君。今この世の何処かで「お前もそんな事を言いながらどうせ百合の間にちよいちよい入ってくる阿呆男なんやろ騙されへんぞ」という過激派の血の叫びが聞こえてきた。

その通りだ。何なら両者から俺は気に入られている、そこは踏まえてもらおう。

「いつまでそこでニヤニヤとしている、掃除はどうした？」

「あ、すみません」

すみませんと言ったことで俺はいきなり一回り年下の美少女に5分ほど怒られた。礼儀がなっていないのはマジなので俺は頭が上がらない。す“い“ませんね、はい。ごめ

んなさーい。

名前をヘルメス。下の名前はウンタラカンタラーと長いのだが、ブロンドの美少女百合っ子が大体彼女の全て。

つい五年前くらいに両親が死んでしまっているので、びつくりすることに俺より小さいのに家主。しつかりしてて頭も回る、中世近世辺りの身分高い系女子にありがちな謎会食とかパーティーでも評判がいいらしいと同僚の掃除ガチ勢からは聞き及んでいる。俺も鼻が高い。

対して俺。屋敷の清掃員。小間使いとかというよりは清掃員、つまり掃除ガチ勢として彼女の屋敷に住み込みで働かせてもらっている。給料は高いが仕事の誇りは高いどころか一ミリもない。お金を老後に向けて貯めるだけのしょうもない男だ。

「仕事に不満はないが、そうニヤニヤされると気持ちが悪い。少し気をつけてくれ」
「は……」

見ての通り、ヘルメスの俺への当たりはそこそこキツイ。いや全く礼儀もなつてなければヲタ笑いを浮かべる俺に原因は有るけれど、彼女はその生い立ち柄とてもキリツとしてしまった。

してしまった。五年前のあの日までには天真爛漫だったような気もするし、俺にも凄くなついていた。いや俺の好感度に関しては素行の悪さがバレただけなだけだ。

お察しの通り受け。攻めるわけがない。

「そう言えばヘルメス様、お言葉ですが俗世のちよつとアレな本はもう少ししっかり隠しましょう。俺は全く気にしてないんですけど、アストラさんに見つかるかと凄くメンドクサイと思います」

「!? 見たのか!」

見ました。噛み砕くと百合のエロ本でしたね、文章系のねつとりした奴だったから「あ、ふーん」って素で言ってしまったレベル。

翡翠の瞳が驚愕でぐにやぐにやと光を反射する。次に取ったのは俺のなさけない首元をたぐり寄せて矢継ぎ早にまくし立てること。あら哀れ。

「い、言うなよ! アストラには絶対言うな!」

「言いませんよ。ああでも面白そうかも……………」

冗談半分で言ったら更に焦った彼女の真つ赤な顔が視界いっぱいに繰り広げられる。首痛い。

「駄目だったら駄目だ! 何をされるか分かったものではないじゃないか!」

「冗談ですよ冗談。ヘルメスちゃんほんとは昔から心配性ですね」

うっ、と唸る。

昔は木登りをして猫を助けてあげたりよくしたものだ。めそめそして俺の所に泣き

つくもんだから流石に面白いそうなだけだったんだが、あの時の涙混じりのありがとうとキラキラした笑顔は加賀百万石を優に超える報酬にござった。

あの頃のヘルメスは俺にも可愛かった。今は夜のお相手の前のほうが余程可愛いのではないか？ まあ良いんだけど。

「後は、〃 そういう事〃 するのは良いんですけど声抑えてください。隣の部屋で寝かせてくれる温情有難きこと限りなしでは有りますが、やはり俺も男なので」

「は、はあ!」

聞こえてないと思つてたのアレ。プレイの詳細まで筒抜けですよヘルメス〓サン、言葉責め割と気に入つてららしいね。

別に俺は旧世代的な「女同士がそんな事をふじこふじこ」なんて言う男じゃない。寝れないこともないというか最近慣れてしまうという驚愕の適応をしたのでオツケーなのだ、何かの拍子でこの事実を彼女が知ったら恥ずか死するだろう。

今のうちにワクチンのつもりで教えておいてやろう。という俺の親切心だ。だったのに。

「何故反省文を書かされてるんだ俺……………?」

めっちゃ怒られて涙目の現当主殿から反省文を仰せつかって早三十分。俺は今何をしているのか自問自答が激しくなって思考に論理バグが発生しそうだった。

屋敷は言葉通り屋敷で結構広いのだが、でっかいテーブルで一人紙とにらめっこする絵面は大層アホっぽいだろう。というのもヘルメスが「今すぐ書いて!」と紙とペンをしっかりと握らせて怒鳴ってきたのだ。ちゃんと持つてきてくれる辺り、やっぱり何か嫌いにはなれない。

まあ付き合うのも務めなので付き合うが……………。

「でも文字苦手やわ〜! マジで!」

「また反省文?」

ひょこつと、頭をかきながら天を見上げた俺の視界に女の顔。思わず紙まで体を揺り返す。

「うおっ!?! あ、アストラさんか。びっくりした」

「さんは要らないよ、年下だし」

んなこと言ったらヘルメスに俺が敬語使う筋合い無いから。

アストラ。アストラ・ファンタール、この屋敷で長いことをハウスキーパーと侍女を兼任してるメイドの家系。

フアンタールという家系は跡継ぎの女の子が恵まれないと引き取ってくるらしいが、彼女はそちらの方。鋼のようなながら淡い輝きを放つ銀のポニーテールと、いつも何を考えているのかわからない薄目がトレードマーク。

俺より後から入ってきた、と言っても差し支えはないが仕事能力はアストラの方が圧倒的。というかフアンタールの家系は多分どの代もすごい、先代も凄くお仕事の速いおばさまだった。俺の師匠だ、掃除しか出来ぬ無能に育ってごめんさい。

「まあハウスキーパーに侍女つて字面が力強いから。俺は長いものに巻かれるというか巻かれに体を回す人種なので」

「そう？　敬語は酷いけどね」

先代の当主さんにも結構ネタにされてた。あの人は俺の言動より「お前やたら掃除できるなく〜！」と言って可愛がってくれるタイプだったが。抱かれても良い上司一位。

「敬語とか気にしない辺り、結構ヘルメスちゃんも先代と似てるんだよな。良い気質だと思うよアレは」

「あ〜……………」

やっぱり敬語とかマナーで人を測るっていうのも一定の限界が有って、いやまあ俺が該当するとは思わないがそういう事にとらわれ過ぎないっていうのは統率者に有って良い能力だと思う。

と考えていると、気づけばアストラの笑顔が曇っていた。何か言いにくそうと言うか、苦笑いと言うかそんなものが混じった乾いた声。

「いや、そうじゃないですかね？　こんな敬語も背筋もフザけてる男、寛容な家じやなきや雇ってくれませんよ。多分」

他のお家知らないけど。偶に会った時に知り合いの掃除ガチ勢とかから聞きかじる程度だけだ。

アストラがやれやれ、と言った感じでようやく喋りだす。

「へ？？？？？メス様はそう？？？？の厳しいと思うよ？　あなたが特別」

「ん？？？？　いや、ああ？？？？」

「違？？？？うと言おうと思？？？？つたが心当たり超あるわ参ったな。」

「言われてみればさつきも敬語関連で怒られたわ」

「そう。だからそれでも側に置きたいだけじゃないかな——」

ところで。

そう言った彼女の赤い瞳が僅かに開く。ヤバイ、なにか俺は要らないことを言ってしまった予感だ。

アストラが目を開いた時は大抵最後に俺が追加で怒られるバッドエンドシナリオに直行するお約束キャンペーンが存在する。

逃げようと思ったが手を掴まれた。おかしいよ全く体が動かない。

「さっきは何の話してたの？ 自分から絶対にヘルメス様に話しかけないよね？」

「アツイヤベツニイ!? ちよくつと怒られただけですよ！」

無事全部吐きました。凄い圧力だよ毎度ながら、くらげレベルでフヨフヨしている俺には約束を守り通す強さはない。

その日の夜は俺との関係性について言葉責めされてた。声おつきかったね、ふたりとも。

今日も今日とて無事、俺は“エロい神の見えざる手”で百合のシチュづくり貢献させられた。ちなみに後日すごい涙目で怒られた、ゴメンよ。

第2話

今日も今日とて過激派の凶刃に震える愚かな被害妄想家、掃除ガチ勢です。

多分マジでは殺されない、メイドの過激派連中は視線だけで殺そうとしてくる。俺が悪いので弁明なし。

アイツらは俺がいきなり変死体になってもアス×ヘルに亀裂が走ると知っているのだ、その努力にジョセフ並みの反り返る敬礼を禁じ得ぬ気持ちをいつも抑えています。ちやらけてるけど本当に。

さて。こう卑屈になつても仕方ない、俺は精々空気に務めるだけ。

じゃあヘルメスのお屋敷、ルチアーノ家のお掃除事情の話。

「兄貴！ 数時間怒られましたよオレ!?」

「マジか」

例のデカイテーブル。ヘルメスとは何か代々この家は使用人の余暇は大事にするらしく、何ならヘルメスと同じ席で食事も許される。今回もそうだ。

運が良いと言うか、俺はいつもどおりヘルメスとは当然、逆位置イツ！なので横で騒

ぐ男の話は過激派に届いてない。お前、ぶっちゃけ生きてるだけ奇跡よ？

「レノン、何というか悪い」

レノン。俺の後輩の男の使用人。ちなみにメイドの男性系はボーイ、メイドがメイドンから来てるから。

こいつは異性への意識が薄く、あのカップルにも一定の距離感を気づこうとしてる。俺が気配を消して、喋りかけられても耳が悪いふりをして首根っこ掴まれてようやく話に応じようという中、容赦なく会話を試みてる。

しっかしうちの男連中では実は俺が最年長なのだが、誰も彼も百合過激派メイドに怯えるか、大人しく見守るパパ連中か、大体そんな所でヘルメスは女と以外喋らない。

こいつは無謀ながらヘルメスにとっては憎らかぬ男（好きとはちよつと違う、興味本位か）で、まあ俺も放置はしている。

今回はヘルメス了承のもと、掃除をさせる——予定だった。だったけどダメだったんですねこれが。

「兄貴は本当に五分プリンプリンされるだけのご褒美お叱りで済んだんですか!？」

「バツカお前！俺が刺される!？」

ほらヘルメスが俺に気づいた——！はい詰み——！過激派見ないで俺は何もしてないホントだ。

思わずレノンを怒鳴りつける。

「お前な！ ご褒美つて俺が言つたみてえじゃねえか！ 嫌だよ、普通に怒られたら給料も下がるしな！」

「す、すみません！」

でも「すみません」が言えるだけ俺よりはえらい男だ。もう何も言うまい、強く生きろよパリピボーイ。お前は良いやつだ、良いやつだと皆にしつかり気づいてもらえ。

ヘルメスがちよいちよい、と手招き。雇われは逆らえない、また過激派が俺を見てるよ違う！ 俺は無実だ！

「な、なんですかねヘルメス様」

「隣。避けられてるようで気分が悪い、座ってくれ」

かなり驚きつつ、保険にもう一つ保険をかけて静かに二つぐらい間を置いた。

「話は聞いていたか？」

「聞いてました、俺は自己保身の方が大事なので。レノンにしてください」

アイツが死んでも俺は死なないから。

途端にぶすつと俺を睨むヘルメス。パイセン、おいこらアストラ把握してるだろ助けやがれ畜生め！ あー薄目が開いてる！ バッドエンドじゃくん☆

踊るしかないっ。いや違うわ座るしか無い？ いやダメだ命がけ過ぎる。

「いいから。私がそうしろと言っている」

「そうだよ？　主に逆らうのかな？」

アーストローラー！　夜の美少女一人で飽き足らず俺ですら弄ぶかあッ！

冷や汗を流してレノンにレスキューサイン。アイツは「やっぱ兄貴仲いいんすね☆」って顔して青ざめながら逃げた。後で覚えてろクソ後輩……………っ！

スイツチの入ってしまったヘルメスさん。完璧に俺の方を向いて怒り出す。

「いつもそうだ。部屋に入る時はノックをしろというのに、それすら守れない。どうしてだ？　そんなすぐに同じ過ちを繰り返す筈がない、お父様が雇った男だというのに」

お前から俺の目の前でおっぱじめるじゃん。

俺知ってるよ？　変な声出すもんね、誤魔化し方下手過ぎて笑えば良いのか冷や汗流せば良いのかも分かんないよ？

羞恥プレイは結構さ、好きにしてくれ。ただ目の前でするな。

だからノックする前にうすうす開けて確認する。お忙しそうだったらすぐ走って逃げるためだ、過激派もこればかりは俺の整ったフォームの全力疾走に領いてくれるから大正解だぞ。

アストラは隠れてるからバレてないと思ってるのか、俺も含めて遊んでるのか。さっぱり分からんが碌なもんじゃない、せめてメイドの前でやれ。過激派なら扉を締めて出

ていった後に鼻血を出して倒れてくれるぜ多分な。

ちなみにレノンが怒られたのはこのうすく開ける動作。なつてないと俺も怒られる、だが命は惜しい。

もう一個別の理由もあるがそこは割愛。

「私が嫌いなのか……………」

うわ涙目になるな、俺が他のメイドから睨まれてる。普通に俺自身も申し訳ないわ。

「ええーいやー、そうじゃなくて…………ええつと……………」

さつさと食事を済ませるとヘルメスに引つ張り出された。もちろん俺は睨まれていたよ過激派に、アストラ君は笑つてないで俺の命がある内に助ける。美味しそうに野菜を頬張るな。

「手短にお願ひします。ただでさえヘルメス様に色目を使う不埒な男、なんて風評被害が出回つてるので」

「言わせておけ。気など無いくせに」

無い。俺は不倫の趣味はない、百合とか関係なく。

ただ何となく分かったかもしれないが、俺は大した身分の男でもないし、ここに代々仕えてた家系とかでもない。金持ちでもない以上、ヘルメスとの接触を拒まないのは「逆玉の興狙いでは」という見方が出てても仕方ないと思う。

似たようなやつが周りに居たら、俺だつて脳裏をよぎる展開だ。ヘルメスは若いし、心配だからな。若気の至りで禁断に身を乗じたりされても困るよね、いや別の禁断には片足突っ込んでんだけど。

「どうして私を避けるんだ。何かしたか？」

「いいえ？ 俺はあくまで雇われ、一歩下がるのも仕事なので」

そう言うのとヘルメスの表情が目に見えて力を失う。

「……………私が嫌いなのではなく？」

「……………!? どうして？」

いきなり素つ頓狂なことを言うので頭痛がした。

弱々しい声に罪悪感がひしひしと。俺だって人間だし、小さい頃から面倒を見てた女の子相手なのでそりゃあ辛い。

年の差はあれど、まあ兄貴代わりをしていた時期もあったからなあ。

「五年前からずっと避けられているような気がする……………」

「ああ。まあそうだ」

アストラが来たのもそれくらいだ、俺は邪魔にならないように徹底的に逃げた。

タメ語もある程度直した。肉体接触は極力控えた。お互いの部屋には簡単に入れなくした。そもそも出来るだけ喋らないようにした。

何故だつて？ 俺は彼女持ちを寝取る趣味なんか毛頭ない。

百合だの同性愛だの語る以前に、恋愛の水を刺したくない。

「私が冷たくなったからか」

「違うよ」

「じゃあアストラに場所を取られたからか」

「全然違う」

「何で」

「俺は雇われだ」

同様に。

「お前の邪魔をするために働いてるんじゃない」

泣きそうな顔をされたが、懸命にこらえた。甘やかすもんじやない。

今でこそアストラも笑ってくれているが、いつか俺が邪魔に思う日も来る。責める気もない、好きな相手を独り占めしたくなるのは当然だ。

百合は難しい。時代観が近世のここではまだアブノーマル、相方がふらふらしらないか

不安なものじゃなからうか。

俺は小さい頃からの知り合いで、馴れ馴れしくて、近い。いやー、これは近づいたらアストラですら誤解しますぜ？

「俺よりもっと大事なものが有るだろ？ なっ？」

ついでに言うのと、ノックしないのは別に理由がある。

「後な、ノックは理由があるのよ」

「……………どうして？」

寂しそうに潤む瞳。俺は目を合わせながら心の目を逸らす。直視が辛い、弱々しい喋り方をされてももちろん弱い。

穏健派百合厨はのたまい続けるがそれ以前に人間なので。

「お前よく勉強してるだろ？ 空いた時間とかも机にかじりついて」

気づいたのは机の不自然な痕。生まれた頃に仕入れた机のはずなのに、ヘルメスの部屋の机は細かい傷がたくさんある。

多分、勉強しているのだろう。政治学？ 社交界のマナー？ いや分からん、でも何か一生懸命じゃないかな。手が疲れるまで筆圧は強くない子だ、机は昔から大事にしていた。

夜もよく灯りがついている。見られたくないんだろうと思う。

「それは……………」

「そしてお前が一番気になってるのは、うちの雇われの態度」

皆、妹とか娘みたいな扱いをしてるフシが有る。

ダメだね。人を招いた時に舐められる、まだガキだな——なんて皮肉もきつと何
度言われてる。

だから努力は見せてはならない。突然大人になって、当主と認めさせる必要がある。
懸命さは人の心を打つだろうけど、当主としての品格とは見てくれないかもしれない。

そういう経緯だと思うが、絶対に見せないように気を払っている。それが要因で部屋
の掃除は俺だけが担当するんだろう、どうせ俺は知ってるから。

メイド達の前でも、彼女は「ヘルメス」ではなく「ヘルメス・ルチアーノ」であるべ
きだ。徹底している、凄い努力だ。

正直俺を今日呼んだ時は焦った。相当なことだと分かったというか。だから即座に
止めなかったアストラを内心とがめてたと言いますか。

「でもお前、俺にも努力とか見せるのだいっきらいだろ？ だから様子伺ってんのよ、間
が悪くならないように」

とはいえ、20も通り過ぎてないただの子供だ。俺がいくら知っていると見
られるとバツが悪い。

ちよつとぐらい強がりにつき合つても過激派も俺を責めまい。そういう理由もあつた。

「別に構わないが」

「あれえ????」

「どうせ俺を見ても私の扱ひも、見方も、何一つ変えない。それが貴方という人間だ」

一本取られたわ。当たり。したり顔が憎たらしい。

子供つて成長すんだなあ、こんな自慢げな顔してるのに。子供の頃に虫を取ってきて俺に振りかざしたあの時の顔とそっくりなんだが、随分凛々しくなつたように錯覚してしまつた。

「はい、失礼しますよ」

ノック。ああ言われては仕方ない、俺も出来る男ではなくとも分かる男だ。妙に不審感を覚えさせたのは素直に悪く思ったので、反省してノックはすることにした。

——が、がたんと何か人の塊が暴れる音。

いやまさかな。言ったそばからな？ 俺信じてるぜヘルメス・ルチアーノ殿？

「あつ、ちよ、待って——」

息、荒くない？ ねえ、何か呼吸二つ聞こえるような？ 扉越しだから断言はしませ

んけどね？

いや落ち着け掃除ガチ勢。疑いすぎだ。アイツ自身が心配するなど言つてのけたん

だろう、当主の信頼と自信も受け止めずして何がガチ勢だ。

そう俺はいつだって掃除だけはガチな男、ちやちやつと仕事を済ませよう。

「入りますよ……………」

がちゃん。

服のほだけ気味なヘルメスを見て俺はぶわりと涙を流す。

「ああ、待ってくれ。これは少しだな、暑いというk——」

「あ、悪い。用事思い出した」

「ふざけるな！ ふざけるな！ バカヤローツ！」

即座にダツシユした後、自室の枕に向かって五分ほど男泣きをして叫んだ。

信用するんじゃないやなかった………。過激派の凶刃に怯える日々はエスカレートの一途をたどるんだろうか、もう俺退職しようかな。

第3話

おはよう、今朝は絡まれた過激派と長い話し合いをして「偶にはヘルニアアスだよなあ」と二人で唸っていたら別の過激派に凄い目で見られました、CP無固定穏健派の百合厨です。

しかし俺の前にいるのはCPでも何でも無く人間で、ふたりとも人となりを一定知ってる身としてはイキるヘルメス君とよわよわアストラ君はただの興味本位で見たいと言いますか（ry）。

殺される前に黙ります。

「げほっ！ げほっ！」

「おいおい、水飲みなさい水」

ほうけた顔でコップをひったくるなり、ぐいと一気飲みしてしまった。目も胡乱で熱は上がってきてるらしい。

すごく簡潔に言うヘルメスが熱で唸りっぱなしだ。あんまり簡単に泣き言を言う

性格でもないから、多分結構な高熱。

という訳で俺とレノンの二人がかりの看病体勢。過激派に心臓を握られたデスマーチに我々の冷や汗は地に流れ落ちる一方であった。

軽く額に手を当てるとえげつない温度。

「うおーやばいな、レノン。タオル頼むよ」

「了解です、走りましょうかオレ!？」

「病人の前で騒ぐな、静かに行ってきなさい」

「はい」

兄貴って呼ぶのを放置したらマジモンの舎弟オーラを發揮しだしたぞアイツ、俺はどうしてこう妙なものに囲まれがちなんだ……………?」

ヘルメスがうーうー言いながらベッドから身体を起こす。

「おいおい寝とけて」

「手、つないで」

「はいはい。繋げばいいのね」

行動範囲が瞬間的にヘルメスの片腕分しか無くなった。今気軽に了承したのかなりミスだわどーしょ。

あたり前のことにしても、ヘルメスの手は小さくて細い。そんな昔と変わったんだろ

うか。

背負うものばかり大きくなって何だかわいそうには思う。俺にはどうにも出来ないけどね。

ありがちな手に抱きついてくるなんて展開もなく、呆れるような甘ったるい声ももう聞こえず。漠然と、人一人分挟んだような距離で手を繋ぐだけ。

もう甘え方分かんないんだろうな。

「アストラも居てやればいいのに……………」

「確かにそうですよね、らしくないというか」

いきなり顔のすぐ横からレノンが出てきて飛び退く。

「うわキモチワル!」

「酷くないですか兄貴!? オレ言われたとおり静かに帰ってきたのに!」

「あ、うん。そうだな、ごめん」

確かにそれも一理あるわ。

アストラは「当主不在の分回すことはいっぱいあるよ」と言うなり今日はずーっと働き詰めだ。何だか俺から見ると逃げてるようで複雑なものがある。

俺の手元に気づいていたレノンがほーと唸って俺に肩を組んでくる。

「ずいぶん信頼されてますよね。あのヘルメス嬢が肉体接触をしたがるなんて、過激

派に刺され——ヒイツ!？」

言った側からアイツの首の皮一枚をブレッドナイフが通り過ぎました。過激派こわく。

完璧にビビってしまったのか俺に縋り付いてくる。うっとうし!？」

「邪魔だよ気持ち悪い」

「オレはちよつと「ヘルメスさんが甘えたがるなんて信頼されてますね」って内容を言っただけなのに!？」

「まあ、そうだな」

俺が見捨てる気マンマンなのをようやく理解したらしく、隣に丸椅子を置いて物憂いげに座り込む。

「そこまであのヘルメスさんに信頼される兄貴も凄いいし、ヘルメスさんも強いというか——」

「違う。俺達がそうなるように強要したんだろ、勘違いすんじゃないやねえ」

おっと。つい強く言い過ぎてしまった。

だがこんなガキが強いなんて幻想は早めに捨てて欲しいところはある、ヘルメスはそうあれかしと叫ばれればそうあろうとする人種だ。

よーやくレノンにはちよつとだけフランクになってきたのに、ちよろつとそんな事

言つてまた一から振り出しじゃ困るといふか。

「……………すみません。そりやそうか、まあ、そういう事なんですよね」

あからさまにシユンとしてしまうので俺も参つた。

柄にもなく頭なんか撫でてしまう。

「俺も悪かつた。何か、そこら辺は短気なんだよ……………ただ、まあ出来ればこいつは

「唯の女の子」と思つてやつてくれ。頼むな」

「はい、分かりました」

こう素直なやつつてのは凄えなあ、俺は今のではない分かりましたなんて言えねえわ。正しいとかそういう問題ではなく。そういうの無い？ 意地つて張りやいいもんじやないとは分かるんだけどな。

暫くぼうつとした顔のヘルメスを眺めていたら、俺の中でとてつもなく変態チックな趣味嗜好が顔をのぞかせていた。

心臓をバカみたいに鳴らしながら指を口元に近づける。

「兄貴!?! それは危険です、どうか犯罪臭いですよ!?!」

「ちよ、ちよつとだけだよ……………ほら? 俺だつて時々ご褒美の一つぐらい」

「血迷わないでください兄貴!」

ちゆ。

唇の柔らかい感触、吸い付きも程よく有って、途端に我に返る。やばい罪悪感だ、やっぱ俺にこの手のことは無理です殺される前に俺が死んでしまいます。

すぐさまを手を放り投げてレノンの両肩を持った。一瞬指に凄く吸い付かれる感触の記憶が残っていたが急いでデリート、俺の神経が爆発する。

「良いか、よく聞けレノン。今のこいつを正常に看病できるのはお前だけだ、俺が明日変死体になるとしてもこいつの看病をしろ。良いな？」

「あ、兄貴……………」

さーてクラウチングスタイル！

俺は持ち味の瞬発力で開いたドアから見えた刃物を避けながら廊下に躍り出る。

「兄貴イイイイイイッ!!!」

後ろからソードブレイカーとか飛んできてガチ焦りした、しかもアイツラ足速い!?

「うゝつ、おゝえゝえ……………！ は、走り、すぎた……………」

いや今回は完璧俺が悪いんだけど、にしてもアイツラ執念深すぎる……………逆になぜ普段は生かしておいてもらってるのかについて5000文字くらいの論文にして俺に提出して欲しいレベル。

喉もカラカラ心も疲弊気味、かなり死にかけの状態でフラフラと廊下を歩く。

「凄い顔色ね。大丈夫？」

「ア、アストラさん、かね……………？」

思わず倒れ込みかけた所でさっきの出来事を思い出して五歩ほど距離を取る。

浮気相手が本妻頼っちゃダメでしょ!!! いや何かヘルメスが浮気してるみたいで今

の凄い失礼だな、まあ良いか。

「……………？ 別に倒れ込んでくれば良いのに、潰れたりしないけど？」

「ちやうねん……………ちやうねんな……………ごめん……………」

事情は言えずじまいでした。僕はあまりに軟弱者だ、きつと未来永劫この日を悔やんで居もしない神様相手に教会で頭を垂れようとするのだろうか。

くだらないモノローグ口調はさておき。

「そうだそうだ、アストラさんに話があったんだよ」

「ん？ 何かな」

「ヘルメスの看病してやってくれないか」

単純におつかしーなーと思っていた。

侍女つてのはつまりお付き、お世話役、小間使い。考えればすぐ分かる、この類のワドの連想に違わず基本仕える側とはべつたりだ。

じゃあ意図的に距離を取って俺に任せたってことになる。

へんだろ？ 常に正位置なアルカナぐらいおかしい。今だつてあからさまに固まった、わつかりやすいな〜も〜。

「ああ、でも私忙しいし。あなたはまあ、ヒマじゃない？」

「ひつど!? 過激派に神経をすり減らし怒鳴るヘルメスに鼓膜を破られ嘲るお前に網膜が灼ききれそうな俺にそこまで言っちゃやうの!？」

「何というかずいぶんな積年の恨みを感じる……………」

そうさ積年の恨みだよ。自覚してください。

というかちやつかり逃げやがった。

「それはそうと何で嫌がんのよ」

「ええ〜？ だって私管理職だから忙しいし、そこまで全力で付きつきりにはなれないし。中途半端に置いていっちゃやうのも酷いしね」

「嘘つけアンタが仕事を処理できない訳あるか」
やる気になりやどとうとでもするタイプのくせに。

そろそろ逃げ道がなくなつたと見たのか、アストラの表情が電源でも落としたみたい
にぱったり消える。

元々こいつの薄ら笑いはただの芝居だからな。ここに来てすぐは仏頂面でなーんも
言わないから苦労した、困つたら笑つとけば良いんじゃね——なんて無責任なこと
を言ったのは俺だつたっけ。

「……………うーん。じゃあ、昔から大事に持つてるものつてある?」

「大事に持つてるもの? 何だおもむろに」

「良いから良いから」

喋り方だけいつもどおりなもんだからちよつとだけ歪。

しかし俺が昔から大事にしてるもの……………大事にしてるものお? えー、あー、
あつ。

あえて言うならむつかし買ってもらったデュエルディスク。ここに来るまでずーつ
と押し入れに入ってたのは覚えてる。

「あるにはある」

「今も壊れてない？」

「そりやそうだ。大事にしたんだから」

じゃあ分からないか、と少しだけうつつむく。

「私ね、昔にもらったおもちゃがあつて。すつごくお気に入りでつたんだけど」

「ふん」

「触りすぎて壊しちやつたんだよね。もうぼろぼろ、母様もどうしようもないつてさじを投げたくらい」

あの人さがしを投げるつて言うのと相当だ。もうグツチャグチャだつたんだろくな、俺もよく服とか縫い直してもらつたもんだ、もうガキじゃねえつて言つてるのにアツプリケとか付けちやつてさ。

——ここまで来て、話になんか察しはついた。

とはいえ喋りたいのだから水は刺さない。ゆつくり、アストラは喉に支えたものでも吐き出すように、結構な時間を置いてから続けた。

「人も一緒で。なんて言えば良いんだろう………モノ扱い？　で大事には出来るんだけど、何というかさそれ以外のやり方つてよく分からなくて」

「だから腫れ物みたいに扱つちやうか、執拗に触れ合つて結局お互い傷つけ合うか。一か十しか無い」

たまに在るな、そういう奴。

人つていうのはもうただだメンドクサイもんだ。まあ仔細は省くけどとりあえず、結構難しい。そういう事もある。

珍しく、心の底から寂しそうに笑う。

「だからさ、こういう時は。うん、距離を置かないとダメだと思う」

「触りすぎてまた壊しちゃうもん」

割り切ったような言い方のくせに、妙に言葉は躊躇いがある。

そんな事もなくないか、と言おうとしたがその前に言葉がまた飛んでくる。意図的だ、こいつは頭がいい。こういう時は間違いなく意図的に俺の言葉を潰してる。

「それと看病つて適切な処置もだけど、やっぱり気持ち？ とかそういうの、大事なんですよ？」

なんですよ。この言い方が引つかかった。

要するにこの女、感情の機微が分からないのだ。

ヘルメスには割とたしなめるような事も言うし、仕事もできるし頭も回る。だから大半のやつが誤解しているが、この屋敷でぶつちぎりで精神年齢が低いのは誰かと言え

ば。こいつだ。今だつて困つたように手を後ろに組んで、何だか泣きそうな子供みたいな

面しやがる。

「私そういうの下手だし……でもあなた！ あなたはそういうの得意でしょ！ だからヘルメスも懐いてると思うし。だから適任だと思う」

ふーん。

「いや、お前が診てやれよ」

「今のじゃ納得できない？」

「違うね、理屈は正論だ」

あんまり多く語って知った風を装うつもりはないが。

今回に関しては違うと思う。

「不器用でもちゃんと呼んでやれば良いんじゃないの。傷つけあえ、喧嘩しろ、酷いことでも言っちゃまえ、不器用でも好きにしちまえ」

「最後に謝れば良いんだよ。あいつはそれで納得できるやつだし、お前はそうしないと一生苦しいんじゃない」

これ以上しやべることが思いつかん。

変に喋って大人の面したくはない。皆どっかがキだ、俺もそうだし、まあ今回は俺が単純明快な解決法らしきものを知ってただけだし。

呆然とするアストラの横を通って飯を食うことにした。バカじゃないし、俺がストラ

イキ起こすのも予定内だろ。

「最適解で恋はできねえぞ、ねーちゃんよ」

「あああああああああああ！ 何カツコつけてんだ俺!! ほんと死ぬ!! いやむしろ殺して!! おい過激派何やってんの!! 今こそ出番だろうが愚図の役立たず共め!!」

「おー、兄貴が一段と荒れてますね」

これが荒れずにいられるか!? ノリに乗って恥ずかしいSEKKYO垂れてんじやねえよバカなのか!?

あーヤバイ、過干渉ダメ絶対の誓いを思いっきり破ってしまった。しかもなんか上かららしい!? やべえ、あつちが気にして無くても俺は今日からもう気になつて仕方ない人生しか送りようがない!

やけっぱちでビールを胃に流し込む。爽快感もない、ただただ吐き気がしてきた。

「でも兄貴兄貴、なんかアストラさんが看病やるって言つてオレ追い出しましたよ?

兄貴の苦悩はもう! さっぱり! わかんないですけど! 結果は上々なんじゃないですか?」

「知るか!? 死にたい!!!!!!」

今日ばかりは挨拶代わりに飛んできたブレッドナイフのノーコンさを呪つた。